



男声合唱組曲「雪明りの路」		
春を待つ	作 詩	伊 藤 整
梅ちゃん	作 曲	多 田 武 彦
月夜を歩く	指 揮	広 瀬 康 夫
白い障子		
夜まわり		
雪 夜		

作曲家 **多田 武彦**

新月会50周年記念演奏会おめでとうございます。

機会あるごとに申しあげているのですが、新月会や関西学院グリークラブや林雄一郎先生の存在は、私にとっては、同志社グリークラブや私の育った京大男声合唱団と共に、その後の私の創作活動の源流とも謂えるのではないのでしょうか。それほど、新月会や関学グリーの演奏を聴くたびに、その力強い構築性や均整のとれた様式美は、西欧の古寺院や日本の数寄屋建築のそれに似た迫力で、私の心に迫って来ます。

ここ半世紀にわたって、私は、この特色がどこから生まれてくるのだろうか、私なりに探求しつづけて来ました。それは、一つには、揺るぎなく受け継がれていく伝統の強さのためであり、そしてもう一つには、技術的な面で「リズム、旋律、ハーモニーへの忠実性」と「古今の名演奏家たちが秘伝として身につけている楽譜に表わされていない多くの表現力」を、永い歴史の中で培って来たためでありました。この強さは、更に今後増幅されて、100周年へ向って進んでいくことでしょう。

幼いころ、ある人から、約1カ月に1度、晴天の西の夜空にかかる新月を「希望の月」と呼んで、その新月がこれから大きくなっていくことにたとえて、都度新しい希望をもつことを、教えられました。これは、その後、人生の循環や変遷の素晴らしさを私に認識させました。私は今も仕事に疲れたときなどに、ふと新月を仰ぐとき、もう一度、気を取りなおし、希望をいまくことにしています。そして、同時に口ずさむのです。あの「OLD KWANSEL」を。